

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	渡 邊 政 寿
2. 審査委員	主 査：連大教授（上越教育大学） 大場 浩正 副主査：連大教授（鳴門教育大学） 山森 直人 委 員：連大教授（兵庫教育大学） 吉田 達弘 委 員：連大教授（兵庫教育大学） 吉川 芳則 委 員：連大教授（鳴門教育大学） 幾田 伸司
3. 論文題目	The Effect of Extensive Reading in Japanese High School Students in the Classroom: Focused on the Development of Writing Ability
4. 審査結果の要旨	論文提出による学位申請者 渡邊政寿 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和4年7月31日（日） 10時45分～11時45分 場所：Zoom による遠隔会議 1. 学位論文の構成と概要 本論文の目的は、日本人高校生の英語での発信力、とりわけ書く力を伸長させるために、教室内多読という手法が有効であるかを明らかにすることである。具体的には、英語作文力を構成する下位5要素のうち、どの要素に対して読むことが関係するのかを調査し、併せて、多読が作文力に効果をもたらすメカニズムについて探った。また、量的研究のみならず、質的研究を含めた混合研究法を採用することにより、英語作文力が向上した学習者の多読に対する取り組みや、英語を書くことに対する言語面、および心情面での変化についても明らかにした。 第1章では、日本人高校生の英語を書く力が不足している点を指摘し、本研究実施の理由となった問題の所在を述べている。EFL環境、すなわち、英語に触れる機会が教室内だけになりがちである状況における日本人高校生にとって、アウトプットのために必要なインプットの絶対量が不足していることが指摘されている。英語で書く力を伸ばすために必要な、読むことによる十分な量のインプットを確保する手段として、Graded Readersを教材とした英語多読を、英語の授業内において実施することの意義を説明している。 第2章では、先行研究を概観している。作文や読解の定義や認知プロセスを比較検討し、英語多読への理論的背景となる根拠を探った。作文については、「計画→翻訳→確認」という過

程を辿るとする、Hayes (2012) と Zimmermann (2000) の作文の認知プロセスを取り上げた。読解については、Grabe & Stoller (2002)を取り上げ、L1 (第1言語) 読解力の構成要素は、上位レベル・下位レベルの処理、およびワーキングメモリに分けられ、下位レベルの処理が自動化されることにより、ワーキングメモリの注意資源が節約され、上位レベルの処理に使われることで読解が向上することを指摘している。読解のプロセスとして、ボトムアップ、トップダウン、相互作用の3つの処理を提唱しているモデルに言及している。また、多読の定義や効用を述べ、読解と作文の相補的な関係を論証する事例を概観している。さらに、受容語彙が発表語彙に変化する要因である単語親密度と、頻度の関係を調査した先行研究を概観し、両者とも英単語認知に影響を及ぼすことを確認した。併せて、読解面だけでなく、多読の情意面における効用について先行研究を基に論じている。最後に、ESLおよびEFLの両方の環境において、多読を通して文法が伸びた事例と、読解を通して作文力が伸びた事例について概観し、明らかにされた事柄と問題点を整理し、本研究において調査が必要な内容を指摘している。

第3章では、本研究の調査方法について述べている。事前・事後テストに関する予備調査と、本調査の研究課題、参加者、使用教材、手順、データ分析方法について説明している。参加者は、多読実施時においては、多読後に書く活動を実施する群 (ERW群) と、多読のみを行う群 (ER群) に分けられた。加えて、データ分析時においては、事前テストのスコアに基づき、作文力上位群と下位群に分けて分析した。テストスコアに対しては3要因分散分析および単回帰分析、アンケート項目に対しては因子分析を用い、また、振り返りシートに対してはM-GTAを用いる、混合研究法を採用した。

第4章では、調査結果を報告している。3要因分散分析の結果から、ERW群とER群の間には有意差は認められなかったが、下位群において英作文能力を構成する下位要素である内容、論理・構成、語彙および言語使用の4項目において、有意な伸長が認められた。単回帰分析の結果から、ERW群においては言語使用と読解力、ER群においては語彙と読解力との結びつきが認められた。因子分析からは、「英語・多読好意」「速く正確な読解可能」因子などが抽出された。上位群、下位群共に類似の傾向が見られたが、下位群にのみ「適切な教材と難易度と類推可能による理解度増大」因子が抽出された。M-GTAからは「書くこと」に関して、下位群では多読実施の全期間を通じて「書けない事実」は存在したが、中期になると「成果」と「前向きな姿勢」が出現し、後期にも同様の結果が得られたことが明らかになり、因子分析同様に情意面での効用があることが判明した。

第5章では、結果について理論的背景ならびに参加者のコメントをもとに考察している。本研究では、下位群において多読によって作文力が向上したことが実証された。特に、多くの先行研究で言語使用が向上した結果が得られていることに対し、易しい教材を読むことで速読力が向上し、語彙に使われる注意資源が節約されて文法に向けられたために、その力が伸びることを示唆したと言えるが、これはVanPatten (2004)のinput processingに依拠すると考えられる。情意面においても、下位群では教材が適切であったために、英語学習への抵抗感が減少し、楽しさを感じるようになることから意欲的になり、能力が高くなるという、Nuttall (1982)の「読書の好循環」に入ることが明らかになり、教室内多読の効用が証明された。具体的応用としてHayes (2012) と Zimmermann (2000) の作文プロセスを基本とし、本研究での情意面での効用を踏まえ、日本人高校生の英語作文プロセスをモデルとして表し、多読による変化を提示した。

第6章では、本研究を総括して結論を述べ、教育的示唆、および限界点と今後の課題を述べた。研

究結果より、あえて書くという練習を短時間実施しなくても、教室内多読により英語作文力が向上すること、および情意面において前向きな状態であることが作文力向上に重要であることが明らかになった。

2. 審査経過

本研究の目的は、次の3点を明らかにすることである。すなわち、(1) 日本人高校生を対象に、教室内英語多読によって、英語作文力を構成するどの下位要素（内容、論理・構成、語彙、言語使用、句読点等の形式）が向上するか、(2) 英語作文力のどの下位要素が、英語読解力に関連があるのか、および、(3) 日本人高校生がどのように多読に取り組んだか、また、英語を書くことに対して、どのような変化を感じたか、を明らかにすることである。

日本の英語教育の課題の一つとして、文部科学省が目指す英語力の到達目標を達成していないこと、特に、英語を書く力の不足が挙げられている。本研究は、この課題に取り組むものであり、その解決策として、アウトプットである英語作文能力を伸ばすための大量のインプットを教室内多読に求め、理論的な根拠と豊富なデータにより、その効果を検証した点で評価できる。

また、本研究において、高校生に対する教室内多読が、英語作文能力が低い群に対して英語作文を構成する「内容」「論理・構成」「語彙」および「言語使用」の下位要素において効果が確認されたことは大きな成果である。質的な分析からも、教室内多読による情意面の肯定的な変化が明らかになり、今後の発展として、実際にカリキュラムに組み込んでいく際の示唆を得ることが出来た。さらに、本研究は、実践への示唆のみならず、読解と作文の理論的な枠組みを基に、英語による教室内多読がどのように英語作文能力の伸長に寄与するか、得られたデータを基に独自のモデルを提案しており、そのメカニズムを解明しようとした点でも評価することができる。

本研究では、データ収集に用い英語作文テストの内容や母語における作文能力の影響など、課題もいくつか指摘されたが、日本における英語教育の実践の展開に大きく寄与する研究として認められる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 渡邊政寿 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。